

# 先週の回答



カチ、カチ、カチ、カチ。亀小路伯爵邸の応接間の柱時計が正確に時を刻んでいる。夜中の十二時五分前。怪人二十面相はまだ登場していない。

世界に二つとない百カラットのダイヤの宝石「竜の眼」を必ずいただきに参上するとの予告の時間まであと五分。

名探偵といわれる金田三耕助がソファから立ち上がると同時に警視庁の轟撃部が大声で、

「怪人二十面相などと厚かましく名乗っているが、われわれのこの厳重な警戒に手も足も出ないであきらめたんだよ。ははは」と自信たつぷりに高笑いしたが、金田三耕助は静かに、

「彼はもうこの応接室に来ております」とつぶやいた。

「なに、どこにいるんだ!」

警部だけでなく、応接室に集まっている一同(当主の亀小路伯爵、その妻霧子、令嬢玉子、執事の五右衛門、その他女中のキヨ、料理長、ばあや、召し使いAとB)が、ほぼ同時に声を上げた。

「二十面相は、その名の通り何にでも変装できる男です。すでにこの中に変装しております」

ギョツと、お互いに顔を見合わせ、お互いに疑い深い穿鑿顔になる面々。

「彼は約束の十二になつたら、この中の誰かに変装した顔をほぎ取って正体を現すにちがいません、あと五分で」

カチ、カチ、カチ、カチ、時々刻々と魔の時刻に迫る柱時計を、固唾を飲んで見守る一同。



ポーン、ポーン……。柱時計が十二時を知らせた。

その頃、「やばい、寝過ごした! チコクだ! 目覚ましかけ忘れた!」

と変装するヒマもなく、いつもの黒マスクにマントをひるがえした格好で、大あわてで怪人二十面相は渋谷駅の改札口を飛び出していた。

